經濟論叢

第八十六巻　第二號

労働市場論なき賃金論……岸本英太郎　1

ブルック・ファーム……穂積文雄　19

イギリス革命における農業・
土地問題分析の視角……尾崎芳治　47

社会科学のひとつの立場……出口勇蔵　61

《記　事》
昭和三十五年度京都大学経済学会大会における公開講演
および研究報告の要旨……　74

昭和三十五年八月

京都大學經濟學會

社会科学のひとつの立場

出口勇蔵

一

ルーマニアに生まれたリュシアン・ゴルドマン Lucien Goldmann（一九一三――）という人は、いまフランスの「高等研究院」École pratique des Hautes Études の教授であるという。この人の『人間科学と哲学』（Sciences Humaines et Philosophie, 1952）という小著がほん訳され、「岩波新書」――訳書の表題は「人間の科学と哲学」――の中に収められて出たのは、去年の暮のことである。訳者は清水幾太郎氏と川俣晃自氏の二人であって、原書一四五ページのうち、「付録」の九ページが省略されていることは、訳書のあとがき「著者ゴルドマンについて」の中でことわられている通りである。

わたしは、この書物をよむまで、ゴルドマンという思想家について知るところは全くなかった。この人は若いときにカントを研究して、弁証法的思考への道を開拓し、弁証法的唯物論の立場に立って、思想史、ことに哲学と文学との歴史を専攻している人である。この人の仕事については、訳書のあとの部分に詳しいから、それにゆずろう。

いまここでこの書物について感想をつづろうとするのは、第一に、ここに社会科学に関するひとつの独創的な立場が語られており、そしてその立場が、わたしが取りたいと思う立場にたいして、多くの点で近親性をしめしているからである。この感想は、だから、ゴルドマンの口を借りて、わたしの考えを述べる機会とすることになっているかも知れない。もしそうとすれば、わたしは相当に卑怯な人間だともいえる。自分の考えをみずから語ることなしに、他人の思索の口まねをしているだけだからである。この批判の正しさをわたしは率直に受けいれよう。そして、近いうちにわたしの考えを発表することを約束することによって、この批判にこたえることにしよう。ただ、わたしがここにゴルドマンにかこつけて自分の思考を感想風につづる

のにも、いくらかの意義はあることを、語っておかねばならない。そしてこれがこの一文を草する第二の理由でもある。

この書物は文字どおり小著であり、社会科学上のひとつの立場を基本的に宣明しようとこころざしたものだから、入門書に数えいれられてよいものであり、その意味で、「新書」の一冊に入れられたと想像されるのではあるけれども、清水氏が訳書の「はしがき」の中で「内容は決して難しくはないが、しかし、飽くまでも、研究者が研究者に向って書いた本である」（ⅳページ）と書いているとおり、あるいはこの言葉の意味する以上に、一般の読者にとって理解しやすく叙述が行なわれているとはいえないのである。問題の提示の仕方自体がある程度以上の専門的な教養を前提しているし、その程度の教養は、「新書」の読者として期待されている人たちには、残念ながら、十分にそなわっていないといわざるをえないものである。だから、本書の内容にたいしては、ある程度の解説をつけなければ――訳者はこの点では十分な心くばりをされたとはいいにくい――一般の読者の思考の糧として、ゴルドマンの思想が消化されることはないであろう。とともに、ゴルドマン自身が自分の思考の方向をスケッチ風に書きとめているという特色がこの書物にはあるから、論旨がときとして飛躍しており、読者にたいして親切な書き方だとはいいかねることにも、注目せねばなるまいと思う。わたしは著者の論旨のはこびをおぎない、ときとしてみられる難解から読者をすくい出せるなどとはいわないけれども、わたしの読み方を伝えることによって、本書の趣旨を何ほどかでも、読者に近づけることができはしないかと、考えるのである。

社会科学というものにたいして独立的な思考が必らずしも多くなく現在のわが国に、本書の紹介がはたしうる役立ちの多いことを信じるものの一人として、わたしはゴルドマンの社会科学論をここに語ろうと思う。

二

『人間の科学と哲学』で論じられている論点は四つ、そのそれぞれが一章を成している。いま叙述の順にしたがってそれらをしるすと、第一に人間科学の対象、第二に人間科学の方法、第三に人間科学の基本的な概念、そして第四に人間科学に適切な論理と類型学への展望――こんな具合である。ここではそのおのおのについてゴルドマンの思想をまとめて追求し、いくらかの註解と批評とをそれにそえるであろう。

第一の論点　人間科学の対象

ゴルドマンが人間科学 sciences humaines と名づけるものは、自然科学と対をなしていると考えられる科学であって、わたしのことばでいうと、人文科学と社会科学との両方をふくんでいる。この科学の対象は、ひと言でいうと、人間的事実 faits

humaines であり、これを現実的に認識するところの科学が人間科学にほかならぬ。著者はこの科学を、社会科学とも歴史科学とも、またかれ自身の研究をめぐって考えるばあいには、「精神の社会学」とも呼んでいる。ところで、人間的事実とは、「あらゆる場所およびあらゆる時代の人間行動 actions humaines によって構成されているものであって、ただこの人間行動が人間集団の存在と構造とにたいして、ある意義なり影響力なりをもっていたとか現にもっているとかいえる程度でのことである。だからまた、この人間行動は、人間集団を通じて、現在あるいは未来における人間共同社会 communauté humaines の存在と構造とにたいして、ある意義なりある影響力などを、過去においてあるいは現在において、もっているといえるのである。」(p. 11, 一五ページ。傍点はもとのもの。訳文は訳書のとおりではない。この点については、以下においていちいちことわらない。)

この引用は、著者が人間科学においては、人間の行動のうちで集団と社会とにたいして意義のあり影響力の多いものをば特に考えている事を、ものがたっている。このことの詳細は第三の論点にゆずることにしたいが、ともかくもここでは、人間科学を代表するような科学とは社会科学のことだということを、まず知っておきたい。ところで、人間の行動が社会にたいしてもつ意義なり影響力なりというばあい、E・マイヤーとM・ウェーバーとの論争において提出されたような問題がある。すなわち、歴史的事件はその影響力によって考えられるのか、それともその事件を考察する主観においていだかれる価値によって意義ありとされるのか、という問題である。ウェーバーが新カント学派の主観主義を一貫させて、後の主張におこなったことはよく知られているだろう。けれども著者はウェーバーのような主観主義をとうざける。かれは人間共同社会とは「一切の人間に妥当する一つの普遍的価値であり」その価値が客観的に存在するという立場をとる、そして、この客観的な価値をもつものに影響力をおよぼす歴史的事件には、客観的な価値が宿っていると、考えるのである。しかし、これだけでは、著者の立場は十分に伝えているとはいえない。著者においては、人間科学の対象とは、実は客体であるとともに主体でもあるものなのである。かれはいう。「現代の哲学者のなかには、デカルト的立場から出発して、人間と人間との関係の問題を『他者』(Autrui) の問題と名づける人もいるが、むしろ、『われわれ』(Nous) の問題と呼んだ方が正確であろう。」(p. 8, 一一ページ) デカルト以来エゴの強調は強く、合理主義や経験論はそれにもとづいて主張されるのだが、この立場からは、歴史とは政局「外的な歴史」であるにとどまり、科学する主体の思考や行動ををつつむ歴史、過去の事実でありながら現在や未来に意義をもちつづけるような歴史というものに到達することはできな

い。このエゴの立場を越えたのは、著者によると、パスカルになるのだが、ヘーゲルからマルクスに至る間に、自我主義から「他のもの」と考えざるをえなかった問題が、主観とともに行動する存在になり、構造は逆転して、「われわれ」が根本的な実在で、「われ」とは派生的なものだと考えられるようになってきた。『われ』と『なんじ』という誤った状況から真の自覚的な『われわれ』への転換ということが、歴史学の認識論的基礎の問題である。」(p. 10, 一二ページ) このように、人間科学の対象とは、客観的な実在であるとともに、われわれの存在と行動とをつつんでいるということのうちに、個有の特徴がある。それは「認識の主体と客体との部分的同一性」(p. 17, 二三ページ) とも書かれている。この特徴をもつものについて、真理を、あるいは古来の用語をもちいるなら「物と知性との一致」を、追求するためには、どんな論理が適当で、どんな種類の認識でなくてはならないのか、このことをやがてわれわれは知ることができるだろう。

人間科学にとって集団が根本的な事実だとすると、個人はどのようにあつかわれるのだろうか。この問題にたいして、ゴルドマンはつぎのような答を与えていると思える。歴史において個人、ことに偉人の影響は大きい、けれども偉人の行動に意義がみとめられるのは、「われわれと過去の人々との間に、積極的にせよ、消極的にせよ、人間的関係を打ち樹てうるような一切のものを示してくれる限りのことである。」(p. 14, 一八ページ) これによってわかることは、著者においては、人間科学が人文科学と社会科学との両つをふくんではいるが、この両者は、社会科学に優位をみとめるという立場で、統一的に考えられているということである。

要するに、ゴルドマンの社会科学論は、社会科学の特色を、まずは対象の規定からはじめるという点で、一九世紀の科学論についていうならば、歴史主義的立場に立って、新カント派的・ウェーバー的な立場を遠ざけているということ、しかし、その対象というのは、歴史主義におけるように、主体との交渉を抽象したものではなくて、主体との交渉をばうちに包みこもうとしているものであるということである。こういう立場から社会科学を展開することを、わたしは全面的に賛成したいと思っている。

三

第二の論点　人間科学の方法

人間科学の方法として、ゴルドマンが指摘する問題点は、客観性・価値判断・イデオロギー・全体性の原理の四つである。このうち、はじめの三つはM・ウェーバーの社会科学方法論において重要な論点であったこと、そして第四の論点はルカーチの強調するところであったこと、これらのことは、読者の容易

に気づくところであるだろう。そして事実また、ゴルドマンは自分の立場をばウェーバーやルカーチと関係させてしめそうとしているのである。この点に焦点を合わせて、著者の主張の特色をたずねよう。

著者がたどる二〇世紀の方法論史において最初にあつかわれるのは、デュルケムの『社会学的方法の規則』であり、ついでウェーバーの『科学論集』が、そしてそのあとには、ルカーチの『歴史と階級意識』がくる。そして著者は自分自身をルカーチのつぎに位置させようとするもののようである。

デュルケムの論点の一つに客観性の問題がある。かれによると、客観性はつぎの二条件を確認するところに生じるのであった。(一) 社会学はどんな価値判断をも基礎づけることはできず、この科学には「技術的」有用性がみとめられるにすぎないこと。(二) 社会学の研究者は個人的な感情による判断のひずみをさけて、事実を正確に認識すべきであるということ。この二条件によって、社会的事実は「物として」「外から」研究されると、デュルケムはいい、その二条件の認識論上の可能性について疑いをいだかなかったほどに、かれは楽観的な立場に立っていた。そしてこの楽観主義は、著者によると、「独自の社会主義的見地を対立させるプロレタリアの発展によってまだあまり動揺していないブルジョアジーの楽観主義的伝統を現わしている。」(p. 25, 三一ページ)

ところが、一九世紀の世紀末のドイツに生きたM・ウェーバーには、この楽観主義はもはや期待できない。かれはデュルケムにはなかったいくつかの問題について真剣に考えざるをえなかった。社会科学の認識から、客観性をうばいとるものが主観の先入的な価値判断であることをウェーバーは覚った。しかしかれはこの価値判断の介入こそが社会科学の本質に属していることを知っていたから、その事態を積極的に利用して方法論を展開しようとした。「ウェーバーにとって問題なのは、一切の先入観念、一切の価値判断を排除することではなく、むしろ、これらを意識的に科学の中に組み込んで、客観的真理の探究の有用な道具とすることなのであった」と著者は書いているが(pp. 26-7, 二三ページ)、かれはウェーバーの方法意識の真相を正しくとらえていると、評せねばなるまい。また「価値判断から独立に対象を客観的に研究することができる」とするウェーバーの方法論が結局は幻想におちいっていると指摘するときにも、かれは正しい見とおしをもっている。ただ、本書の簡単な叙述に関するかぎり、ウェーバーの方法意識の境地をば十分適確にとらえることができているかどうかについては、少しの疑問がないわけにはいかないようである。たとえばつぎの一文は、方法論史の図式的な理解としては興味ぶかいものにちがいないが、ウェーバーの境地を正しく位置づけているであろうか。いわく、「ウェーバーは、曖昧な解決を許すにはあまりに厳格な思想家

であっただけに、価値判断がその構成要素である領域と、これを排除すべき領域とを厳密に区別した、と常に強調して来たけれども、結局、彼の立場は、デュルケム学派の社会学的思想に見られる社会学的決定論 déterminisme social とマルクス主義者における社会的決定論の完全な承認との中間 mi-chemin にある。」(pp. 28-9, 三五ページ) ここにいう中間とはどんな意味をもつ概念として理解すべきものなのであろうか。

さて、ウェーバーと同時にあって、すでに一歩かれに先んじていた思想家があった。その人はゲオルク・ルカーチであった。かれは、著者によると「人間科学における主体と客体との同一性」——これは第一の論点として、紹介者がすでにのべたところである——や「それが人間科学の本質および方法に及ぼす影響」をば、明確に提出した」「ウェーバーの最大の弟子」であるという。(p. 19, 二五ページ) そしてこのことを如実にしめしているものは『歴史と階級意識』の一書である。また著者ゴルドマンがこの書にかかれている方法意識を更に発展させることによって、独創的な境地をひらいていることは、われわれのやがて確認したいと思うところである。

著者はルカーチの提唱する階級意識のうちに、人間科学の客観性のやどる場所をみいだそうとする。知られているように、ルカーチは唯物史観の真理を承認し、資本主義社会においては、革命的な労働者階級の階級の内にこそ、「真なる意識」がやど

ることを、そしてそれ以外の階級の階級意識の内には、生産関係の内や外においてそれらがしめる位置にしたがって、大なり小なり「虚偽の意識」が巣くっていることを、論証しようとした。またルカーチ自身が、現在ではこの主張に自己批判を行なって、これが観念論の誤解への道をひらいていたことをみずから警戒していることも、おそらく周知のことであるだろう。けれども、資本主義社会の内部にあって、生産に貢献するところの多くして、しかもその貢献の正しく承認されることのもっともすくない、階級の反体制的な意識のうちにこそ、社会認識の客観性はやどると考えるルカーチは、思想上の相対主義の内部から相対主義を突きやぶろうとする人であった。そしてこの立場こそは、ゴルドマンが自分の思想を構築する基本的な論陣なのである。ルカーチは、客観性の根拠づけをしようとして、ウェーバーのいわゆる「客観的可能性の範疇」をばウェーバーよりも重大な方法論的意義をもつ概念として採用した。つまり、この範疇はウェーバーでは主観的に構成される理念型の客観的な存在根拠をうらづけるべきものであったのだが、ルカーチでは、思想内容が現実をどこまで表現しえているかが、この範疇によって評価されようとしたのである。ウェーバーでは、この範疇は、社会的存在の実証性にかかわってはいるが、あくまでも認識論上の範疇であった。しかしルカーチでは、社会的存在としての存在論的な意義をにない、社会的存在をどの程度に反

映しえるものかを測定する基準とまで考えられるようになったのである。ところでゴルドマンのばあいには、この範疇にはさらに一層充実した意味が盛られてくる。すなわち、階級意識には、のちに語るように、現実意識 conscience réelle と可能意識 conscience possible との二つがあって、歴史哲学的には、その中の後者において、歴史の諸段階における人類の意識の達しうる――すなわち「客観的に可能な」――最高限のものが語られようとするのである。この意味で、この範疇には、いまや、歴史哲学的に重要なものに成り上がったとみることができる。この点についてはのちにいま一度、ふれるつもりである。

社会的真理のとらえ方を階級構成の内部に入りこむことによって明らかにしようとする、マルクシズムの立場で思考をすすめるゴルドマンにとって、ブルジョア社会学の現状が満足できるわけがない。かれはこの社会学の立場に立つひととして、ギュルヴィチ、フォン、ウィーゼ、アンダーソン、マンハイム、ソローキン、モレノなどを挙げ、それぞれに短評を加えている。いまその全体について語ることはできないけれども、興味ぶかい一点をあげてみると、高度の客観的な認識を誇示しているかれらの社会学は、歴史への通路のない、したがって現実との接触を失ったものになっており、資本主義社会へ人間を「飼い馴らそう」とする技術論に堕落していることを、するどくついているのである。（pp. 48-9, 七八ページ）このように、最近のブルジョア社会学からは客観的な科学的認識が期待されえないと、著者は正しくも主張する。

さて、では人間科学における本当の客観性はどうして獲得されるべきものであるのか。ゴルドマンは、謙虚な態度で、このことの困難さを承認し、その困難を越えて客観的な真理に到達する四つの条件をかぞえている。それは簡単にしめすと、つぎのとおりである。㈠ 人間科学の研究には、階級闘争がおよぼす干渉がおよぼす特殊な困難があることを知り、それをつねに看破すること。㈡ 研究者はつねに自由であり、偏見、権威、正統、異端のいずれともつねに対決する用意をもつこと。㈢ 研究者は自分自身にたいして恒に批判的でなくてはならぬ。㈣ 思想上の立場はすべて、社会の下部構造と結びつけてその意味を理解すること（pp. 48-9, 五八―六〇ページ）。この四つの条件は、科学の客観性は研究者がつねに自由を保持するとともに自己批判を怠たらぬことによって生ずべきこと、また唯物史観を適用することによって期待できることを物語っているであろう。またこれに関連して、ソビエト体制におけるマルクシズムの研究にたいして若干の憂慮を表明していることも、ここでつたえておくべきであろう。

つぎに客観性とならんで人間科学の方法論において重要だと考えられるのは、総体性 charactère total の原理というものである。これは、人間の行動にしろ社会経済史と観念の歴史と

のあいだの不可分な関係にしろ、つねにそれらを全体としてとらえねばならず、一部分をば全体から引きはなして考えるべきではないという原理である。こういえば、ひとは「総体の範疇」Kathegorie der Totalität というものは、これまたルカーチが『歴史と階級意識』との中で強調してやまなかったものであって、ゴルドマンはこの思想を継ごうとするのではあるまいかと、思うであろう。事実はまたその通りであって、たとえ、研究者は現実の一部分について研究をすすめているばあいでも、現実の全体とのその部分の連関をつねに意識していなくてはならないとする、ルカーチの唯物史観にしたがっての命題は、ゴルドマンによって、人間科学の基本原理の一つになっているのである。人間科学には、だから、全体と部分との範疇が重要な範疇となってこなくてはならないし、またこの二つのものの具体的な連関をとらえる論理はどういう論理かということも、ふかく考えられる必要があるであろう。

四

第三の論点　人間科学の認識とその基本概念

この章のはじめに、著者は大へん重要なことをいう。それは「歴史的社会的生活の認識というのは、行動主体の、人間共同社会の自覚、prise de conscience ということである。」(p. 80, 九一ページ) この主張は、さきに語った、人間科学における客体と主体との同一性ということから当然に生ずる帰結ではあるけれども、対象認識がやがて自己認識（自覚）を意味するということは、社会科学を学ぶものにとって、はなはだ重要な認識である。しかも注意すべきことは、認識主体を通して、社会主体の自覚に達するということである。これはマルクシズムにおける重要な主張の一つでなければならない。

ところでゴルドマンが人間科学の基本にすえる概念に、唯物史観と階級と可能意識とがある。

唯物史観については多くを語る必要はない。ただ、かれの強調したいのは、まず、現実を下部構造と上部構造との二つの部分にわけて、前者の決定的な規定力を承認することと、後者の反作用をば、抽象的にではなく具体的に、承認することとは、矛盾しないということである。つぎに、そのことに関連してかれが主張するのは、イデオロギーの相対的自律性の問題である。イデオロギーについて機械論的な経済決定論を適用する結果、思想史が経済史のむだなかざりにすぎないものになってしまうという例を、われわれは多く知っているはずである。

つぎに、著者がルカーチの思想を継承しているということによって、かれの考える階級概念の重要性はほぼ推察されるだろう。「他の一切の集団にくらべて、階級という社会集団のもつ比類ない重要性」(p. 101, 一一三ページ) の句や「階級とは、それぞれに社会組織の全体についてちがった理想を目ざしてい

るものであるから、特有の価値尺度をもっている唯一の集団である」(p. 103, 一一五ページ)という文章などをよめば、この間の消息は明らかであろうと思う。階級という基本的集団にはつねに社会の全体像がやどるという思想は、教えるところが多いであろう。また「本当の社会的機能をはたしている階級」には、現実について真の意識をもちうるという指摘は(p. 57, 六九ページ)、すぐあとでのべる「可能意識」の問題とからんで、階級概念の歴史哲学的意義をあきらかにしたものといえよう。あとでもふれるとおり、ゴルドマンにおいては、階級は世界観の下部構造と考えられるのである。

さて、われわれはさきに一言した「可能意識」について、少しくわしく考える時がきた。上述のとおり、ゴルドマンは、ウェーバーのいう「客観的可能性の範疇」をば存在論的な範疇に改めたルカーチの思想を、さらに歴史哲学的な根本範疇にまで鋳なおした、そしてこれを社会科学者がとくに関わりをもつべき範疇にし上げたのである。

可能意識は現実意識 conscience réelle と対をなす。いま階級意識について考えると、階級のあるがままの意識はその階級が歴史的・社会的にはたしうる役割に応じた社会や歴史にたっする全体的な表象をつねにもっているとはいえない。しかしながら、たとえばブルジョアジーがブルジョア革命において指導的な役割をはたし、歴史的進歩にたいして人類を代表していたときには、この階級の意識のなかには、人類がその時に到達しうる、最高限に具体的な社会の全体像がやどっているとするのである。歴史の先頭に立って雄々しい歩みをあゆむ階級にゆるされるこの、ヴィジョンを、ゴルドマンは「可能意識のマクシマム」と名づけ、これを現実意識と区別するのである。もとより、この認識はその階級の構成員のすべてにたいして可能だなどというのではない。そう考えることは現実的ではない、むしろ、その階級のなかから、代表的な思想家個人があらわれて、その認識をとげるのである。「代表的大著述家というのは、ある階級の可能意識のマクシマムに対応する世界観を多かれ少かれ首尾一貫した仕方で表現する人たちのことである」とかれはいう。(p. 47, 五七ページ)この一文は階級と個人との、現実にたいする関係をば著者がどんなに考えていたかを、しめしている。このように、可能意識はまずマクシマムとして、その充実した、理想的な状態において考えられていることが、特徴的である。現実の大小の思想家たちについていうと、かれらはその可能意識をばさまざまのニュアンスにおいて実現しているのであるが、それらを認識するのにマキシマムの状態においてまず、とらえるということはどういうことか。それのみではない。著者は現実的な意識をとらえるためにも、可能意識を基準として用いようとするのである。いわく、「現実意識というのは、経験的な諸要因のためにこの可能意識が実現せず、むしろそれ

がこうむりそれと対立するようになるところの多様な障害や逸脱の結果である」(p. 120, 一三六ページ)と。このような説明の仕方は、普通の唯物史観の立場からは異様でありあるいは裏切りのように思えるかもしれない。この思考方法はむしろ、古代でいえばアリストテレスの存在論においてよく行なわれた手法である。あるものを説明するばあい、そのもっとも具体的な状態をはじめに表象して、経験的なさまざまの状態をばそれからの欠如態 privatio と考える考え方に遠く通じているからである。この意味からは、ゴルドマンの思考方法には、観念論の臭味がただよっていると、批評する人もあるかもしれない。しかしそれは唯物弁証法の立場を浅薄に機械論に解しての短見であるといわねばならぬだろう。唯物弁証法は観念論の真理をばはばかるところなく止揚しているものでなくてはなるまいからである。

さらに、この考え方とウェーバーの理念型との異同について、少し考えておこう。階級意識について理念型が考えられるとすると、そのものには、没評価的な属性がなくてはならないことは勿論であるが、そのほかに、それの客観的に可能であることが要請せられはするものの、現実的であるものと可能的であるものとの両つの意義がそこにふくまれているなどとは、いえるはずがない。「ある」と「ありうる」との両義が理念型に横たわっているというような訳がない。なぜなら、合理的な構成物であり、認識の手段である理念型は、存在の程度について語ることを要求するものではないからである。ところが、ゴルドマンのばあいには、階級意識には、「ある」程度の意識と「ありうる」程度の意識とがともにふくまれ、この二つのちがいは、歴史においてその階級のはたす役割にかかっているのである。このように、歴史哲学的な概念にまで具体化しているということが、ゴルドマンの階級意識を理念型と区別する特色だと考えてよいだろう。(ついでながらいえば、わたしは、すべて社会科学の概念は、その程度の大小は別として、歴史哲学と結びついているとともに、「ある」と「ありうる」との両義をそなえているものだと思う。だからこの両義をそなえたものとして処理できる論理が、社会科学に適合的な論理なのであろう。)

可能意識について明らかなように、ゴルドマンは人間科学と歴史哲学との結びつきを強く自覚して、その関係をかれの方法論の前面におし出している。たとえば、上に、われわれは人間科学の認識は対象認識であるとともに、主体としての共同社会の自覚であるという注目すべき認識について語ったが、このことを可能にするものは、歴史意識 conscience historique である。いわく「歴史意識というのは、個人主義的自我を超越した態度にとってのみ存在するものであり、またこの意識がこの超越を実現するための主要な手段の一つなのである。」(p. 10, 一四ページ)社会科学と歴史哲学とのつながりを歴史意識の中に

見いだそうというのが、わたしの年来の主張なのであるが――旧著の『経済学と歴史意識』をみよ――、ここにわたしは有力な知己を得た思いがするのである。

さて、ゴルドマンが可能意識の実例として思想史から引き出すのは、ケネーのばあいである。かれによれば、ケネーの「経済表」はこれまで経済思想史上、不遇な地位を与えられてきたものであるが、それは、この天才的な構想をばひとつの可能意識の表現として処理することが行なわれなかったためである、という。ケネーの思想史上の立場がアンシャン・レジームの合法的改良を企てる啓蒙的専政政治のそれであり、そこから経済学史上の特徴も明らかにされることは、すでに多くの人の賛成するところであるとしても、その経済上の立場が全体としてのフランス社会像とどう結びつくかについては、一致した意見があるわけではない。このとき、ゴルドマンのように、ケネーが「諸社会階級の経済的利害関係を調和させる可能性」の上に、フランス王権をきづこうという政治的ヴィジョンを、可能意識としてもっていた（pp. 122-3, 一三八―九ページ）とする解釈は、経済思想を社会的ヴィジョンで受けとめようとするものとして、興味ある提案だと、いわなくてはならない。

以上、人間科学における重要な概念として三つのものを紹介したが、これらがみな、われわれの深い省察を要求するものであることは、いうまでもあるまい。ルカーチの思想を継承しながら、新らしい境地を開拓したという功績を、われわれは著者ゴルドマンにみとめなければならないだろう。

五

第四の、最後の論点　人間科学の論理と表現

われわれは、おわりに、人間科学をつらぬく論理はどんなものか、その用いる概念や法則はどんな意義をもっているのか、についてのゴルドマンの思想をつたえながら、若干の考察をつけ加えることにしよう。

著者は人間科学から科学主義の立場を断乎として排斥する。ここにいう科学主義とは、一九世紀における自然科学の発達に刺戟されて、歴史学や社会学においても起ってきた実証的な社会科学の立場であり、これは付随的に、科学の哲学との関係をば排斥するものなのである。ゴルドマンはこういう立場を、人間科学にふさわしくないものとして排斥する。なぜかというと、科学主義は人間科学をそれの個有の対象について考えてはいず、したがって、それに個有の論理で考えていないからである。

さて、科学主義の立場からの論理は、経験的合理主義にふさわしく分析論理 logique analytique である。わたしの社会科学史を処理する概念でいうと、自然主義の論理である。ところで社会科学史において、これとはことなる論理でいまひとつ有力なものがあることは周知のところであるだろう。それは発生

論ないし流出論の論理 logique émanatiste と呼ばれているものであって、ローマン主義やその流れを汲むかぎりの歴史主義の立場は、この論理にしたがってきたものである。もし分析論理が一八世紀の論理といえるとすれば、発生論理は一九世紀の論理といってよいだろう。

分析論理においては、全体は部分ないし個の集合であり、部分の分析のすえ、その諸結果を集めるならば全体は論理的に構成されると考える。社会についていえば、個人についての分析の結果が集められると、社会全体の論理は成り立つ。経済学でいうならば、古典学派や近代経済学の立場は基本的にこの立場に立つ。ところがそれとは反対に、発出論の論理においては全体が部分よりも論理的にさきにあって、全体の一部をわけもつものとしてだけ、部分の意義は考えられるとする。歴史学派の経済学においては、この論理にしたがうところが多かったのである。この二つの論理の対立関係、ないし互に矛盾し合う関係は、指摘するまでもないであろう。ゴルドマンはこのいずれの論理も人間的事実に適合した論理ではないと考え、人間科学にふさわしい論理とは、その両者の綜合であるような論理、すなわち弁証法の論理、しかも弁証法的唯物論だと、主張するのである。「〔分析論理と発出論的論理との〕二つの態度はそれぞれ歴史的理解に積極的な寄与はしているが、相手にたいする批判も正当なものであるだけに、どちらも人間科学の一般的基礎となるのには不十分のように思われる。両者の綜合は可能であろうか。弁証法的唯物論は、この綜合の可能性を与えるものと思う。なぜなら、弁証法的唯物論は、一切の形而上学的思弁的実体の存在を否定すると同時に、しかも、精神生活をさらに深く広い人間的現実の表現としてみるものであるから。」（p. 130, 一四七—八ページ）弁証法的唯物論は、一方では発出論におけるような超個人的な意識を否定し、階級意識のような集団意識にしても、「人間相互間の影響と自然に対する人間の作用とから生ずる個人的意識とその傾向との総体」であると考える点において（同じところ）、分析論理の真理を受けついでいる。しかし他方では、弁証法的唯物論は個人意識の総体は個人の算術的総和であるとはせず、パスカル、カント、ヘーゲル、マルクスのような思想史上の巨匠たちと同じように、「各要素は、他の諸要素との関係の総体によってのみ理解されうる」と考える点において、発出論の真理をも保持しようとするのである。（同じところ）結局、ゴルドマンの立場は、個人を中心として全体をあとから考える分析論理でもなく、また形而上学的思弁的な仮設（たとえば民族精神）を中心として考え、個人の行動をそこから演繹する発出論でもなく、唯物的な地盤によって規定される階級を中心とし、下部構造として、その表現として世界観——したがって社会像や歴史像をば考えていこうとするものなのである。

ここにわれわれは「表現」manifestation あるいは expression という概念が人間科学にたいして重要なものとして現われるのをみるであろう。階級という集団的な下部構造の表現であるから、このことばは、そこで個人と全体との統一――弁証法的統一――が実現されており、本質的に弁証法的な内容をもった概念であるといえるであろう。

「表現」という概念に関連して、ゴルドマンはルカーチが青年時代の文学研究において提出していたという、「形式」forme という概念を再び力説する必要を感じている。この概念は、階級という下部構造が知的に表現されて、歴史や社会のヴィジョンを提出するばあいに、現われる類型のことであると、解せられるのである。この点についての叙述は簡単にすぎてくわしくは了解できないけれども、今までに説いたところからも明らかであろうように、この類型概念もまた、ウェーバーとその亜流が主張するような、分析論理にしたがって考えられるようなものではなくて、弁証法的な内容をもち、存在と価値、実在と理想、実証性と合理性とを綜合した概念とならねばならぬであろう。

六

上に四つの論点についてみたゴルドマンの人間科学論は、最近の社会科学論として、まことに斬新で将来の実のり多い展開を約束している思想をふくんでいると思う。かれの所論には、ここでは省略しなくてはならなかったが、かれ自身のフランスの思想史の研究、ことにパスカルの研究や、ドイツ思想史としてはカントの思想の成果が裏づけになっていて、単なる思いつきではないことがわかる。ただ、あまり簡単な叙述で一貫しているために、論じるところに若干の飛躍があることをときに否定できない。たとえば、かれは人間科学に適当な論理は弁証法の論理であることを強張して、つぎのように熱をこめて語るとき、われわれは、その意のあるところは、了解するものの、少し戸惑いを感じずにはいられない。いわく、「社会科学が弁証法的あるべきかどうか、と問うことは、社会科学が現実を理解すべきか、それともこれを歪曲し、隠蔽すべきか、と問うことにほかならない。これは、外観はことなり、一見するところだけからは正反対であるにもかかわらず、一七世紀の物理学者たちが、過去と教会とに結ばれた諸勢力の特殊な利益にたいして挑んだ闘争と同じ闘争であり、自由な、客観的な、人間的な認識のために、特定のイデオロギーに反対する闘争なのである。」（p. 79, 九〇ページ）

ゴルドマンは、最近、論文集を出版した。『弁証法的研究』Recherches dialectiques, 1959 がこれである。わたしはこの新著からも多くの学ぶべきものがあることを期待している。ここでは、著者の立場を紹介し、多くの賛意を表するだけで、満足しなくてはならない。

（一九六〇、七、一二）